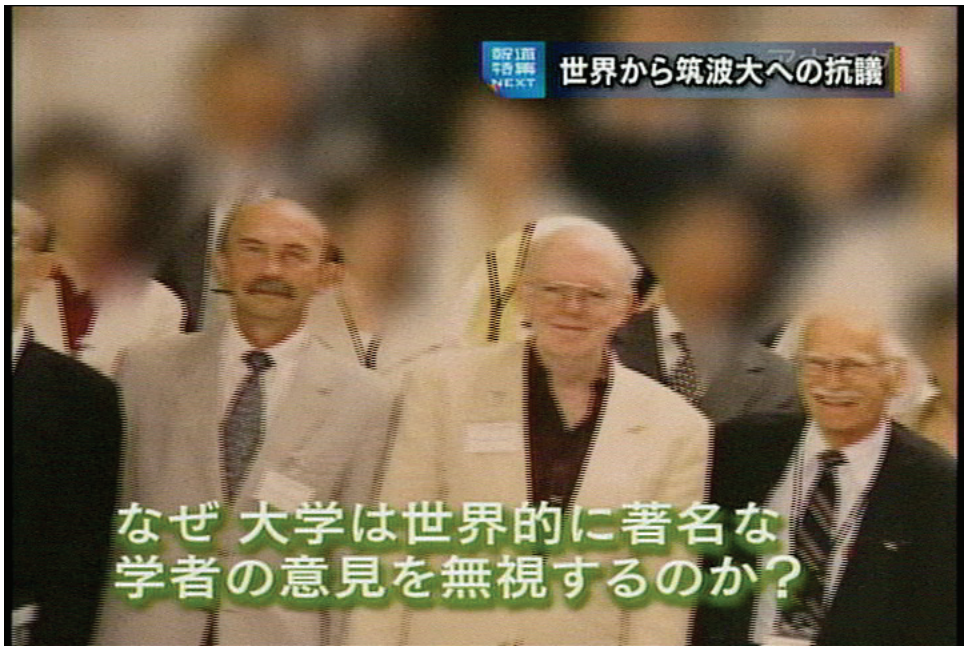
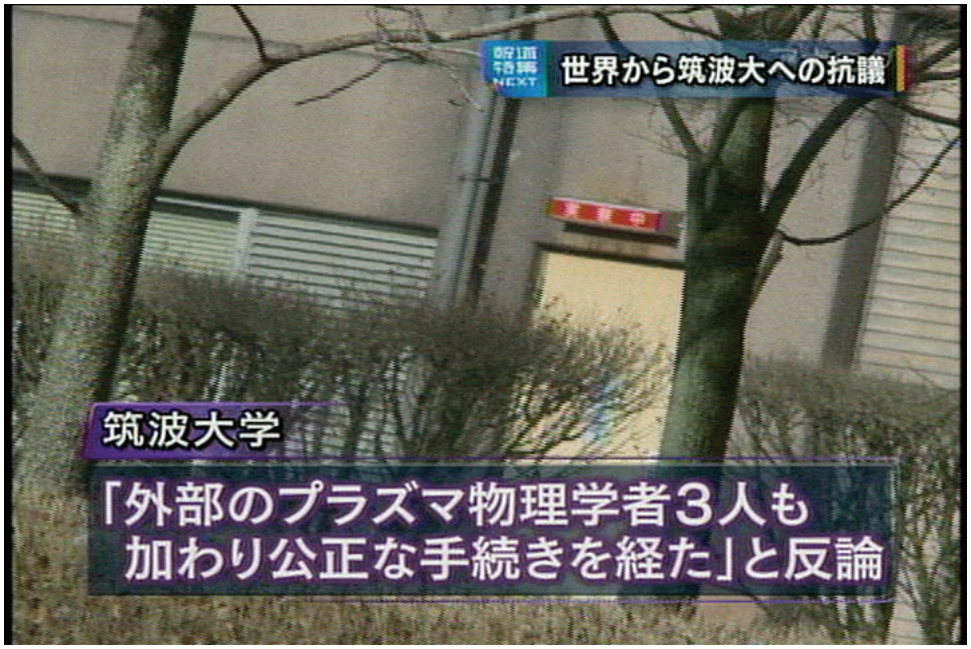


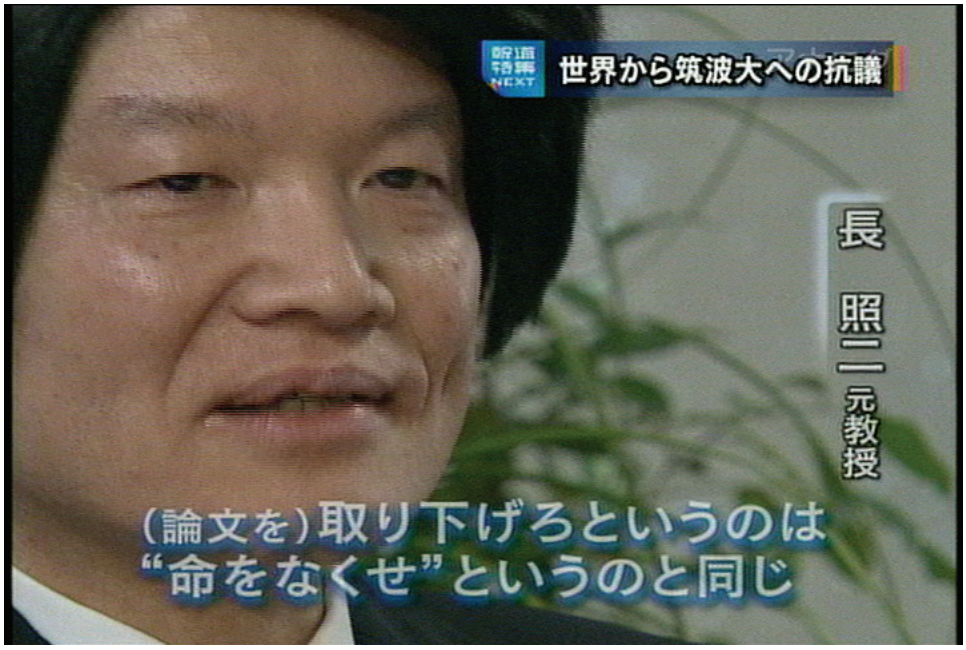
筑波大学は、こうした世界の科学者の抗議に対し、外部のプラズマ物理学者３名も加わり、公正な手続を経て調査を行ったと反論した。



そして去年３月、２７人の著者のうち、論文の取り下げに応じなかった長教授を懲戒解雇、講師３人を停職処分にした。

５カ月後の去年８月、長氏は筑波大学と当時の学長を相手に、不正行為は一切ないとして、教授としての地位保全を申し立てた。

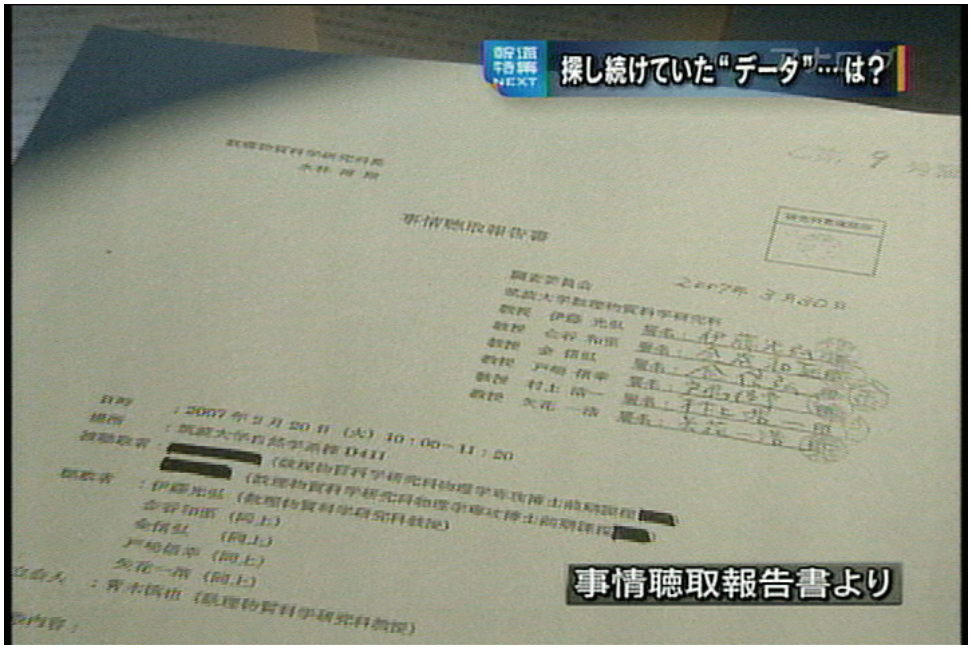
（長照二氏）
「研究者として、論文は命ですよ、それは。学者っていうのは、お金じゃないんですよ。一番大事なのはお金とかじゃなくて、研究論文、研究そのものだから、それを取り下げろというのは『命をなくせ』というのと同じことなんですよ、研究者にとっては。」



２人の大学生の子どもを抱え、妻には当初、法廷での争いを躊躇する気持ちが強かった。

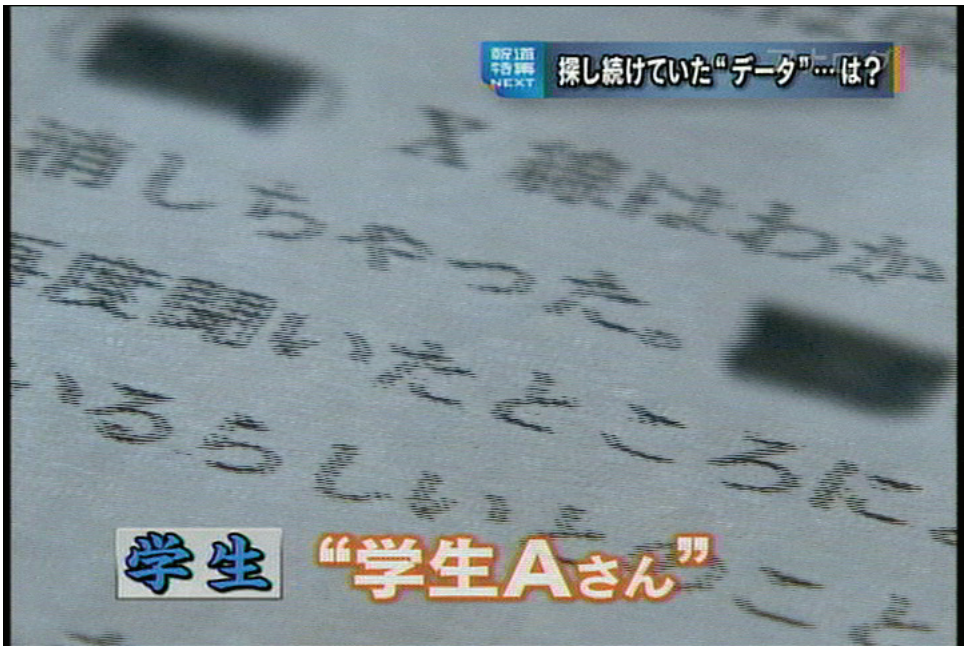
（妻）
「何でそこまで自分の信念通すの、馬鹿じゃないのとか、家族のことちょっと考えてよと思ったこともあるんですけれども、やっぱり、ずっと科学者としてやってきたので、その自分の信念を貫きたいというのであれば、それを応援するしかないのかなと。」

そして、この裁判で、長氏は探し続けていた、あのデータが消えたいきさつを知ることになる。
それは、第１回の公判を前に大学側が提出した証拠にあった。　学生の事情聴取報告書。そこに、こんな記載がある。



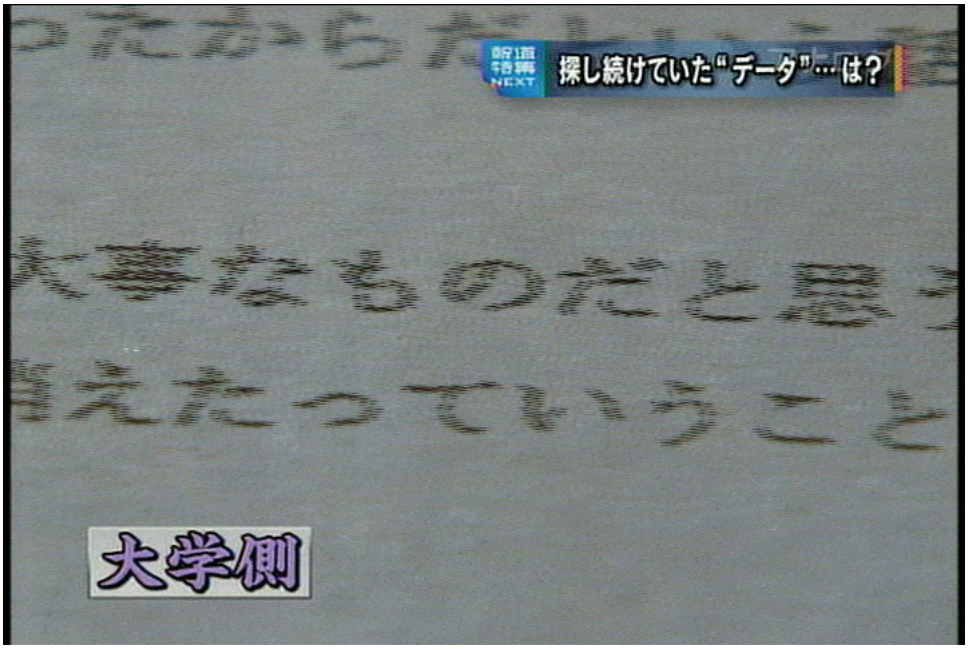
学生

『基礎のデータは学生Ａさんがやめるときに消しちゃった』



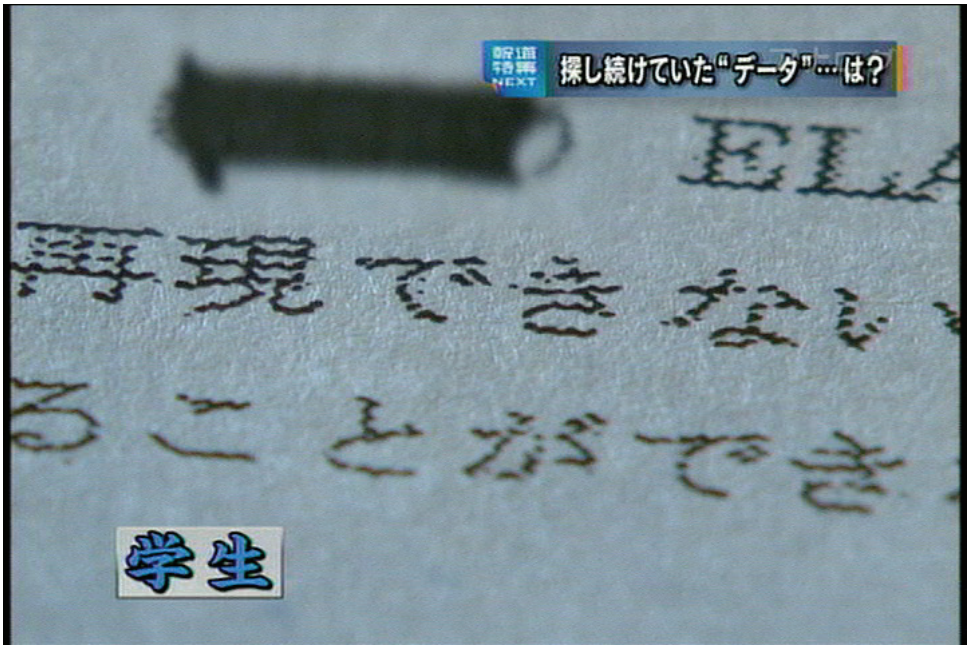
大学側

『基礎データだからものすごく大事なものだと思うが、消えたっていうこと？』

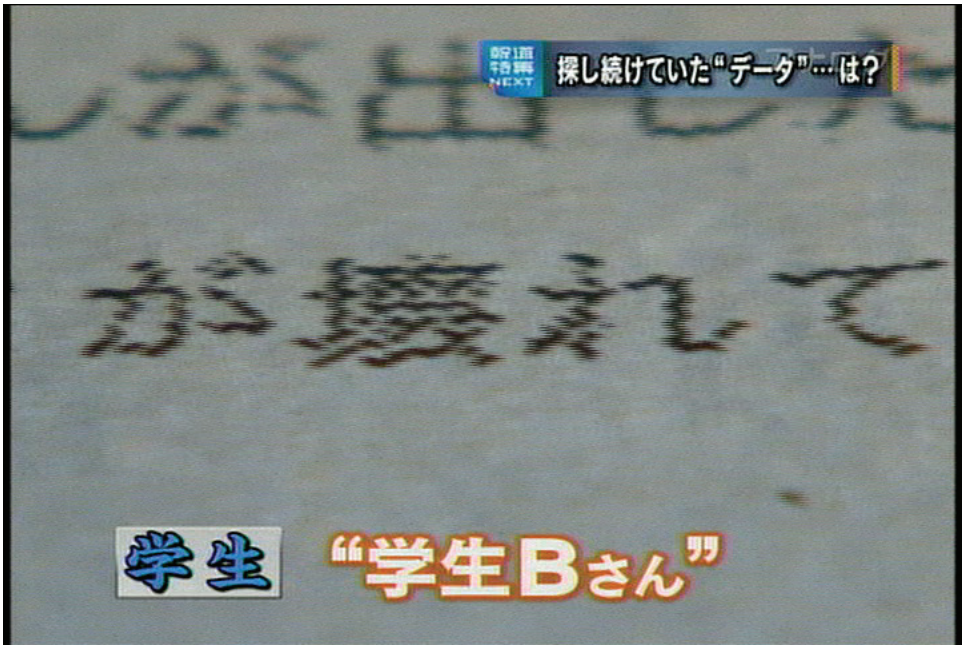


学生

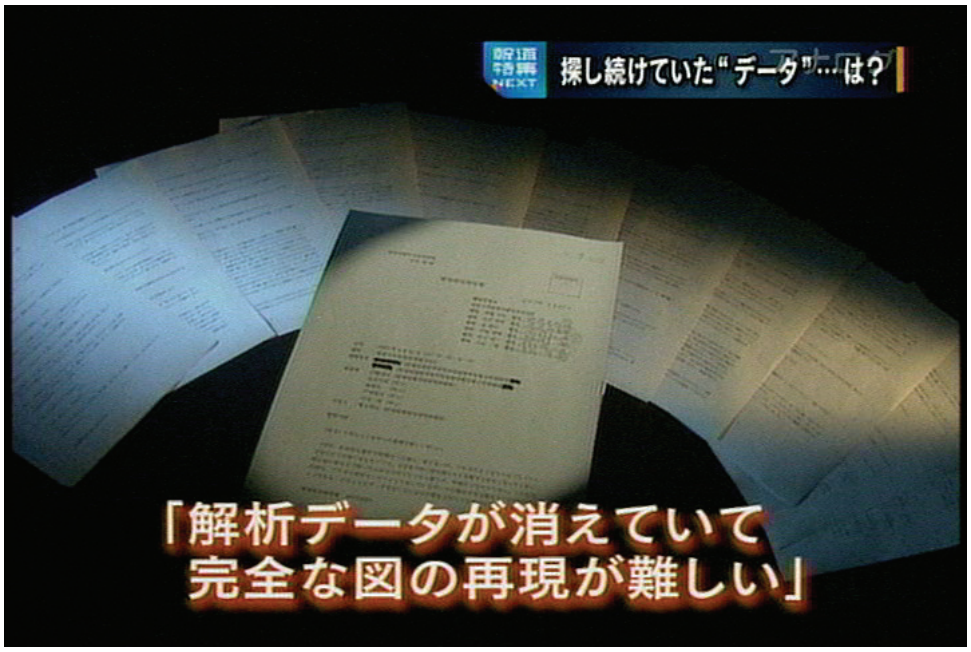
『図のデータの一つ一つは再現できないと思う』



『学生Ｂさんのハードディスクが壊れてしまったので、データを再生するのは難しいと思う』



複数の学生が、解析データが消えていて、完全な図の再現が難しいことを事前に大学に報告していたというのだ。



（長照二氏）
「２つ両方とも消されているということを知っているのに、（図を）１００パーセント再現しないと、それで不正であるというふうにおっしゃるのは、私はとっても違和感があります」

データを消したと名指しされた学生Ａさんは長氏らの論文に改ざんの疑いがあると大学に訴えた人物だという。
本当に学生が解析に必要なデータを消したのか。消したとするならば、その背景に何かがあったのか。

既に筑波大学を離れている元学生Ａさんを訪ねた。

（記者）
「すいません」

【CM】

本当に学生がデータを消したのか。まず、名指しされたＡさんを訪ねた。

（記者）
「すいません」

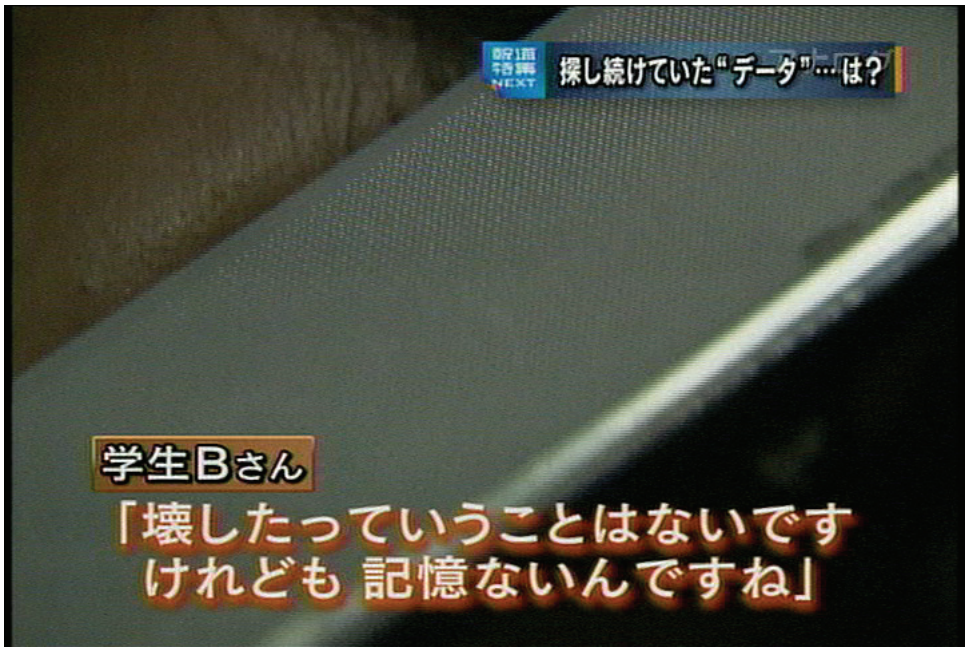
Ａさんは後日、メールで質問に回答した。
『データは、消去していません。解析の途中経過が、Ｂさんの個人のパソコンのみに、保存されていました。そのパソコンのハードディスクが壊れてしまった』

自分がデータを消去したことを否定した。

では、学生Ｂさんはどうなのか。
自分の声を放送しないことを条件に、電話取材に応じた。

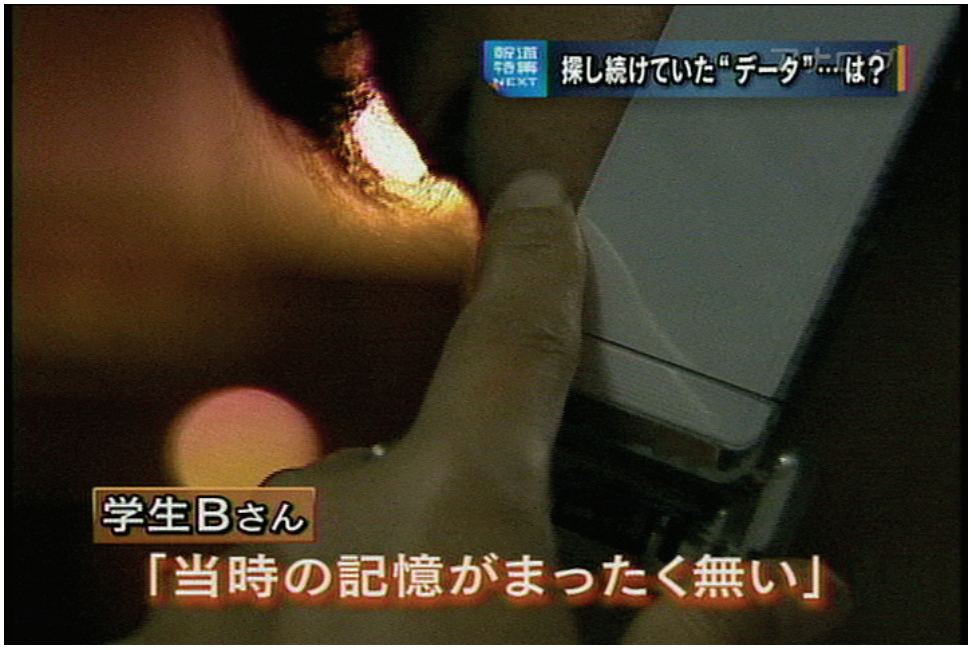
（記者）
「ハードディスク、壊れたんですか？」

学生Ｂさん
『消すっていうことは少なくとも私はしていないです』
『壊したということはないですけれども、私、ちょっと記憶ないんですね』



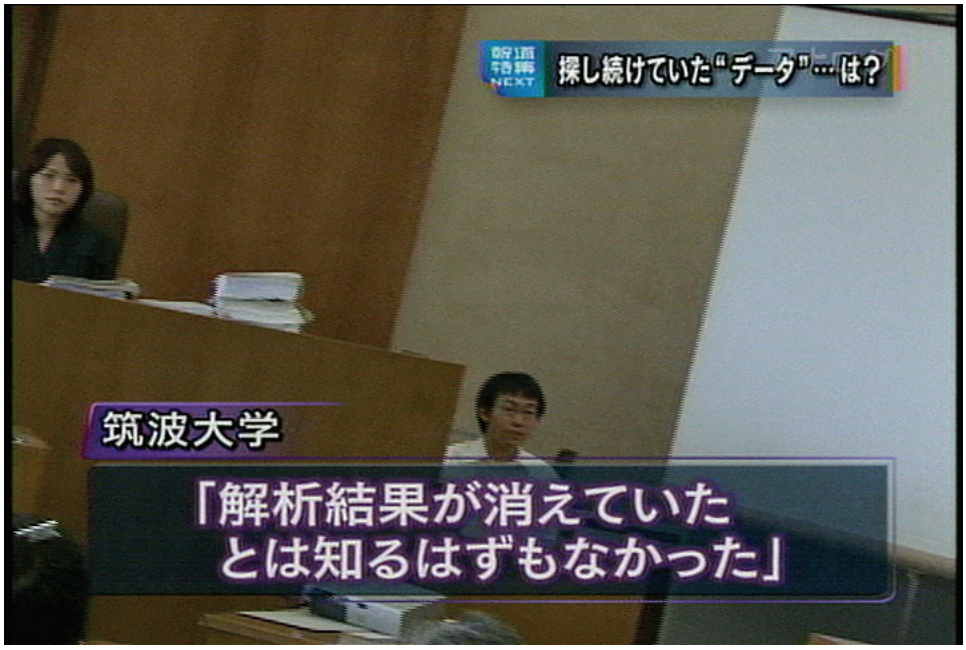
プラズマセンターの共用コンピュータからデータを消したとされるＡさんも、バックアップのデータを持っていたとされるＢさんも、データを消したことを否定した。
証言の内容は、大学の事情聴取の結果とは異なっている。

（記者）
「記憶にない…。かなりでも、何回も（データの提出を）要請されているみたいなんですけども、まったく御記憶にないですか？」



Ｂさんは、当時の記憶がまったくないと話した。

この２人の証言が正しいとするならば、いったい、誰がデータを消し去ったのか。そして、大学側は図の完全な再現ができないと知りながらあえてそれを長氏に求めていたのか。
裁判で、大学は解析結果が消えていたとは知るはずもなかったと主張。あくまで懲戒解雇は妥当な処分だったとしている。真相は今なお明らかになっていない。



（長照二氏）
「科学と違うところで物事が動いているんでしょうね、という気がしますけどね。
でも、それはおかしいよ。それは、改ざんとかそういう問題とは違う話ですよ。」
「そこに、学生を使うなんていうのはね、僕に言わせれば『言語道断』、と思います。」

ある大学関係者は今回の問題の背景について、こう解説した。『プラズマセンターの運営にはばく大な予算がかかる。 長氏の研究実績を快く思わない勢力もいた。データがおかしいとの噂が流れ、それを信じた一部の学生が不満を持ったのだろう。』
取材に対し、筑波大学は『事実は裁判を通して明らかにしたい』と回答した。

日本人で唯一、マクスウェル賞を受賞、アメリカ物理学界でプラズマ部会長を務めた長谷川晃氏。論文の評価はあくまで学会で下すべきだと主張する。

（大阪大学　長谷川晃　名誉教授）

「重要なことはね、論文の主旨が正しいか正しくないかということ。で、(長氏の論文の)主旨は定性的な結論ですから、正しいと、私は思います。」

（記者）

「大学の評価をおとしめたということで懲戒解雇しているんですね。」

（大阪大学　長谷川晃　名誉教授）

「逆じゃないんですか。結果としておこっていることは、筑波大学が学会の評価を落としたことになりますね。この事件の結果、(筑波大学は) みっともないことをしたということのほうが、大半の学者の判断だと思いますよ。」

先月、長氏の支援者らが、筑波大学に処分の撤回を求めるおよそ５０００人分の署名を提出した。
来月２日、長氏は自ら法廷に立ち不正行為がなかったことを訴える予定だ。

キャスター（久保田智子）
「このプラズマ研究っていうのは、未来のクリーンエネルギーを開発するという目的だそうですので、こういう状況で研究が止まってしまうのは、ちょっと残念ですよね。」
キャスター（田丸美寿々）
「ご覧いただいたように、この問題というのは、今、法廷で争われているわけなんですが、抗議している世界の科学者たちはですね、独立した国際的な科学委員会を開いてそこで調査すべきだと主張しているんですね。」
「一方、文部科学省なんですが、国立大学が法人化して以降は人事の問題には口を出せない。裁判の行方と世論の動向を注視したいとしているんですね。科学をめぐる話なのにあまりにもミステリーとか謎が多くて、先生がおっしゃっているように、科学とは違うところで何かが動いているのかなという気がしないでもありませんが、いずれにしても、研究者たちの大事な時間をこれ以上、法廷闘争に費やさなくていいように、早く解決してほしいものです。特集でした。」